

静岡の先史時代の人類史

日下宗一郎

先史時代から人は静岡の地に暮らしてきた。先史時代の人の歴史はどのようにして分かるのだろうか。先史時代のうち、旧石器時代と縄文時代の人の暮らしと環境の変遷に焦点を当てながら、遺構や遺物を紹介することでその人類史を概観する。

愛鷹・箱根山麓には、古富士火山・新富士火山の噴出物が断続的に堆積している。これらの地層から出土する炭化物の年代測定によって、地層の堆積時期を推定することができる。放射性炭素年代測定は、放射性同位体である炭素14が時間の経過とともに半減していくことを利用する年代測定法である。加速器分析装置（AMS）を用いて炭化物の分析をすると、試料の炭素14年代を知ることができる。しかし、過去の大気中の炭素14濃度は過去に変動してきたことが知られており、年代較正を行うことでおよそその暦年代を推定することができる。それによって地層の年代が分かり、包含された遺物の年代が推定できることになる。

旧石器時代の始まりは、古い地層から石器が見つかることから分かる。愛鷹・箱根山麓では、およそ38,000 cal BPの地層から石器が見つかる。この最初の石器は、台形様石器や局部磨製石斧から構成され、旧石器時代人が生活をしていたことがわかる。その後、ナイフ形石器群が使用される時期から、尖頭器、細石刃が使用されるような時期まで、石器群の変遷が観察される。また世界最古の落とし穴や、石製装飾品が見つかっており、旧石器時代の狩猟や装飾品の稀有な証拠を提示している。

縄文時代が始まるのは、およそ16,000年前である。土器が使用されるのがこの時期の始まりである。定住化することが縄文時代の特徴であり、草創期の時期の竪穴住居跡が富士宮市から見つかっている。縄文時代には、弓矢猟が行われるようになり、沿岸部では漁労の証拠が見つかるようになる。特に県西部からは後・晩期に属する貝塚群が見つわかっている。海産資源の利用が行われ、季節に応じた多角的な資源利用にこの時代の特徴がある。

ふじのくに地球環境史ミュージアムの企画展「先史時代の輝き -旧石器・縄文時代の人と環境-」では、県内各地から出土した遺物や人骨を集めて展示を行った。その内容についても紹介しながら、静岡における先史時代の人の生活と環境変化の対応について探る。